



Title	法隆寺・四騎獅子狩文錦の文様と制作背景について
Author(s)	Bujackova, Alica
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100504
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

法隆寺・四騎獅子狩文錦の文様と制作背景について

BUJACKOVA Alica (芸術学・M2)

1. はじめに

法隆寺伝来の四騎獅子狩文錦(国宝、以下「本作」)は、現存する古代染織品の中でも最大級で、保存状態も良好である。先行研究では、本作の文様におけるササン朝ペルシア美術の影響が注目され、異国風の文様をエキゾチックに再構成したものとして概ね7世紀の中国(初唐)で制作されたと推定されている(尾形, 2012)。

一方、中国北部の北朝から隋代にかけてのソグド人墓から、本作の文様と酷似する造形表現が確認されているが、詳細な比較考察は課題として残る。本発表では、先行研究、染織類例の出土情報、東ユーラシアにおける織技術の伝播を整理し、本作の文様を再検討する。さらに、仏教美術および中国在住ソグド人の造形的表現と比較し、その象徴性を明らかにするとともに、制作地と年代を再考する。また、本作の制作背景における中国在住ソグド人の関与についても検討を加える。

2. 先行研究および染織類例の確認

本作の用途について、『歴代名画記』や『旧唐書』、『新唐書』の記述から、「瑞錦」または「大瑞錦」であった可能性が指摘されている(太田, 1977)。瑞錦は供養物や朝貢者への賜物として用いられ、長安の織染署など宮廷工房で製作されたと推察されるが(尾形, 2012)、『歴代名画記』の記述を根拠に、蜀(四川)で制作された可能性も示されている(太田, 1977)。

本作の類似作例として、アスターナ出土の騎士有髭文錦(TAM337:015/0, 657年墓誌伴出)や騎士文錦(TAM322:22/1, 663年墓誌伴出)、花樹対鹿文錦(Ast. i. 3. a. 01)などが挙げられている。花樹対鹿文錦(Ast. i. 3. a. 01)の出土墳墓には墓誌がないものの、副葬品の中で6世紀半ば～後半の硬貨が発見されている。また、隣接するAst. i. 4墳墓からは608年と646年の墓誌、Ast. i. 6の墳墓からは632年の墓誌が確認されている(Stein, 1928)。これにより、7世紀半ばの時点で本作のような織物が制作されていたことが明らかである。

本作および染織類例は、いずれも複様三枚綾組織緯錦である。この技法は地中海東岸に起源をもち、4世紀にはエジプトやササン朝ペルシアで生産が始まった。後に、ペルシア製の錦の技法と文様は東ユーラシアに広く影響を及ぼした。年代が判明する最古の中国製作例は、前述の騎士有髭文錦(TAM337:015/0)であり、これにより綾組織緯錦の技術は隋から初唐にかけて中国へ浸透したとされている(坂本, 2012)。本作は騎士有髭文錦(TAM337:015/0)と酷似しているため、同時期に制作された可能性が高い。

3. 文様の考察

本作の文様を考察するにあたり、連珠円文・狩猟場面・武人像とパルメット副文に着目する。まず主文を構成する連珠円文は、イラン文化圏で吉祥文様とされ、ササン朝では王権を象徴する「フワルナフ(Xvarnah)」の概念と結びついていた(道明, 1987)。ゾロアスター教において、フワルナフはアフラマズダーの加護を象徴し、ササン朝では王朝の安定と繁栄をもたらす神聖な力とされた。より広い意味では幸福や富、永遠の祝福を受けるものと解釈される。そのため、ソグド人墓の造形を含め、天馬・猪・鹿などゾロアスター教の神々の化身である神獣を連珠円文内に表した作例が多く見られる。

次に、狩猟場面はササン朝美術において帝王の偉大さと絶対的権威を示し、宮廷の主要な娯楽でもあった。同様の図像は、中国在住ソグド人の葬具にも表され、例えば安伽墓(西安出土, 579年)や史君墓(西安出土, 580年)、MIHO石棺屏風(570年頃)、虞弘墓(太原出土, 592年)には、饗宴場面とともに王侯の高貴な生活、すなわち幸福の最高段階を表現するものとして表された(Marshak, 2004)。一方、ササン朝では天馬にまたがる人物像は見られな

いものの、史君墓には被葬者の魂が天馬に乗って楽園へ向かう場面が確認される。従って、本作はササン朝よりも中国在住ソグド人の造形表現との共通点が多く、幸福の最高段階を象徴する吉祥的な意味が込められていたと考えられる。

続いて、武人像は上段と下段で形式が異なる。武人が戴く有翼冠は、6世紀の中国在住ソグド人がササン朝の王冠を形式化し、英雄のイメージを強調するために用いたとされる(影山, 2007)。武人の鎧は明光鎧とされ(町田, 2002)、同様の形式は隋末の敦煌莫高窟第 427 窟や隋末初唐の敦煌莫高窟第 380 窟の天王像に確認される。明光鎧は 6 世紀半ば以降に流行し、7 世紀半ばまで簡素で洗練された形式が特徴であったが、その後、装飾が増し、身体各部分に細分化されていった(松田, 1986)。本作の鎧は全体的に簡素な形式であるため、7 世紀半ば以前の形式に属すると考えられる。上段の武人が羽織る渦巻き状の縁取りが施された布は、染織品以外中国美術では類例が見られないが、サル・マッシュハドなどササン朝の浮彫に近似しているため、末端が省略されたササン朝式マントであると推察される。下段の武人の襟に類似する形式は、北齊時代の天龍山石窟第 10 窟および第 16 窟、北響堂山石窟第 4 窟の天王像にみられる。また、6 世紀に遡るビザンチン美術の東方の三賢者、すなわちゾロアスター教の神官像でも同様の装飾が確認される。そのため、この形式はササン朝に由来し、中国に伝播した後、中国仏教美術の天王像に取り込まれた可能性がある。実際、ソグド人墓の守護神像にも表された有翼冠とササン朝式リボン、589 年造営の靈泉寺大住聖窟の神王像にも共通点がみられる。他方、ソグド人墓の守護神像は足元で邪鬼や動物を踏みつける姿や、三叉戟などの持物を持つ姿が仏教美術における一般的な要素である。これにより中国在住ソグド人の美術と中国仏教美術の相互影響が認められ、ペルシアや西域起源の意匠は、天王や力士の護法善神としての役割を視覚的に強調するために加えられたと考えられる。本作のような染織品は、シルクロードを通じた図像伝播において重要な役割を果たした可能性がある。

最後にパルメット副文を取り上げる。類似作例として、北響堂山石窟第 2 窟の半パルメット葉文が挙げられ、これも先端が曲がりくねり、肥満した葉文を表している。本作の文様は、かつての北齊領土で発見された多くの作例と類似する点も注目される。

4. 制作背景の再検討

前述の通り、本作の制作地として蜀と長安などにある宮廷工房が提案されている。蜀は錦綾の生産が盛んで、西域との商道を通じて新技術と異国風の文様が流入していた。何細胡の事例はその証拠であり、彼はソグドから蜀へ移住し、新たな製織技術をもたらして財を成した。孫の何稠は長安の官営工房で活躍し、ペルシアの錦の再現に成功した(De la Vaissière, 2005)。このように、長安宮廷では異国風の錦を生産する環境が整い、ソグド人の直接的関与が明らかである。なお、東魏北齊のソグド人は、王朝の上層社会や政治・軍事活動に積極的に関与していた一方、南朝や西魏北周では、ソグド人の昇進が移民に関連する職務に限られていた(榮, 2014)。そのため、東魏北齊の文化的環境では、異国風の要素が融合した造形表現が生まれ、前述の有翼冠や肩布を着用する人物像の形式が創出されたと窺える。さらに、577 年の北周による北齊滅亡後、人々の移動により中国在住ソグド人の様式は周辺地域にも広がったと考えられる。これを証明するのが、長安出土の安伽墓や史君墓である。

5. まとめ

本発表では、本作の文様が中国在住ソグド人の葬具と比較され、イラン文化圏の「フワルナフ」概念に基づく吉祥文様であることを提示した。また、東魏北齊期に成立した中国在住ソグド人の造形表現との共通点から、本作は長安の宮廷工房で制作された可能性が高く、その制作年代は 7 世紀初頭に遡ると推察される。

参考文献

- 道明三保子 (1987). 「ササンの連珠円文錦の成立と意味」 田辺勝美、堀咲(編)『シルクロード美術論集—深井晋司博士追悼—』吉川弘文館, 153-176.
- 影山悦子 (2007). 「中国新出ソグド人葬具に見られる鳥翼冠と三面三日月冠—エフタルの中央アジア支配の影響—」『オリエント』50(2), 120-140.
- 町田章 (2002). 「法隆寺の四騎獅子狩文錦について」奈良文化財研究所(編)『奈良文化財研究所創立 50 周年記念論文集 3 文化財論叢』文化財研究所奈良文化財研究所, 415-426.

- Marshak, B. I. (2004). "The MIHO Couch and the Other Sino-Sogdian Works of Art of the Second Half of the 6th Century." 『Miho Museum 研究紀要』 4, 16-31.
- 松田誠一郎 (1986). 「南北朝より唐代に至る大陸神将形像の服制・甲制の展開とその日本に及ぼした影響について」 『鹿島美術財団年報』 4, 175-181.
- 尾形充彦 (2012). 「犀兕文錦の研究」 『正倉院紀要』 34, 29-52.
- 太田英蔵 (1986). 「大瑞錦獅子狩文錦について」 『太田英蔵染織史著作集 [下巻]』 文化出版局, 107-134.
- 栄新江 (2014). 「北朝隋唐粟特人遷徙之及其聚落捕考」「魏晋南北朝隋唐時期流寓南方的粟特人」 『中古中国与粟特文明』 三聯書店.
- 坂本和子 (2012). 『織物に見るシルクロードの文化交流—トウルファン出土染織資料—錦綾を中心に』 同時代社.
- Stein, A. (1928). *Innermost Asia*. Volume 3. Clarendon Press.
- De la Vaissière, É. (2005). *Sogdian traders: a history*. Handbook of Oriental studies, Section 8 Central Asia, Vol. 10 (translated by James Ward). Brill.